

特別企画 座談会「友松会創立130周年を迎えて」

平成29年11月29日 収録

出席者 友松会名誉会長 教育学部学部長
元教育人間科学部学部長
友松会顧問 前会長
友松会相談役 元副会長
友松会会長
友松会副会長
友松会常任理事
司 会 友松会副会長

杉山久仁子
福田 幸男
金子 禎
相吉 靖
芦川 弘
高橋 和男
塚田 庸子
野村 啓子



座談会出席者

司会 130周年を迎えるにあたり有意義な希望の持てる座談会にしたいと思います。芦川会長から、130周年を迎えるについての思いをお話してください。

芦川 130周年を迎えることは、友松会にとって誇らしいことです。卒業生の長い努力の成果だと思っております。これまでの伝統を築いていただいた先輩の方々、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。友松会は、現役会員に新たに学生も加わりましたので、大学との連携の中で、ますます存在感があり且つ充実し発展することを期待しております。130周年が良いきっかけになればと思います。

司会 120周年の時に会長でいらした金子先生いかがですか。

金子 130周年を迎えられることは、大変めでたいことです。130周年を迎えるにあたり、友松会が出来た頃、どんな気持ちで



金子前会長

出来たのか。その辺を紐解いてみますと、師範学校の全寮制の中で、切磋琢磨して良い教育者になって、頑張っていくのだという気持ちが強く表れた形

になっていたのではないのでしょうか。10年毎に大きな会をやることで、会員に関心を持っていただけたと思います。私が平成19年に会長を受けた時は、5,000人以上の会費納入会員がいましたが、次第に減っていききました。友松会創立の意図を振り返って、会員が自分たちの同窓会を大事にしていこうと考えるきっかけになるような130周年にしたいと思います。

この10年間の変化

司会 この10年間は大きな変化がありましたので、芦川会長に語っていただきます。

芦川 この10年間は、大きな過渡期であったと考えています。今まで保護者会があり活発に活動していたが、校友会が3年前に立ち上がり、その校友会と同調するような形で学生も同窓会に入ってもらおうということで、保護者会は発展的に解消し、友松会がその役割を担うことになった。その辺を理解していただき、入学時から友松会に入るように勧めています。平成29年度から教育人間科学部が教育学部に戻り、友松会としては、長い伝統の中で、教育一筋ということで、考える視点が一つになりました。



芦川会長

社会情勢の中で、教育界へ進む学生も少なくなってきた。教育の良さ、役割の重要性を学生の皆さんによく理解してもらえよう、学部にも全面的支援をしながら進めていくことが、この10年間の新しい方向として出ている。それから、学生が同窓会員となり、卒業後に教員となった場合は、支部に所属するようになる。ですから、その若い人を支部の仲間として迎え入れ、支部活動を充実させていくことも友松会としては大きな課題となる。教育界に入ると戸惑うこともあると思うが、先輩が温かい指導・助言、仲間意識等を育てていくことにより、安心して教育界で活躍できるような場を提供していくことも友松会の役割ではないかと考え、実施する方向でやっています。

同期会は、同じ同窓会の会員として、教

育界へ進まなかった卒業生たちにも仲間として入ってもらおうことを目的として結成し、学生は教育以外にも様々な形で同期の絆を学生時代に作っているの、その絆が卒業してからも、必ずしも教職とかにこだわらず集えるような同期会を新たな形で充実させていくことを大きな目標として考えております。

大学の現状と課題

司会 同窓会から見たこの10年間の大きな移り変わりについてお話しいただきましたが、杉山学部長からは大学の変革とか目指していることとかをお話し願います。

金子 学部長のお話の前に会長のお話を補足すると、10年前、飯田学長から大学と同窓会の連携を大事にしていこうという大きな目標が出されました。その中に三つの大きな課題があった。一つは、イベントの開催、2番目は集合場所の設置、3番目は卒業生の消息把握であった。3同窓会からメンバーが出て、それを検討した。それで、今行われているホームカミングデーが平成18年から行われるようになった。それから、芦川会長の話されたような大学との関係ができたと思います。

杉山 多分、基本線は大きく変わっていないと思います。大学側としては、とにかく今お金が無い。国からの運営交付金が年々削減されていくことわかっていて、今、何年間の内に教員を何人減らすかという話になっている。その中で、同窓会にもいろんな意味でお力をお借りしたいと思っているのが大学です。



杉山学部長

教育人間科学部に
なったのが平成9年
です。その時点で、460人
あった定員の半分が教
員養成課程になり、
230人しか定員があり
ませんから、当然会員

数が減少する。しかも、最新データでいくと、教員になるのは5割を切って、教員にならない方が多い現状です。平成23年には、さらに学校教育課程と人間文化課程になった。人間文化課程は150人ですが、その中で社会の免許を出していたので、10人前後が教員免許を取っていたという状況でした。それが平成29年度から教育学部に戻り、学校教育課程のみとなり、人間文化課程廃止になったので、学部自体が1学年230人しかないという状況になっています。

文科省のヒヤリングのためにデータを整理していて、教員になる率が半分しか居ないのはなぜかという話だが、教員採用試験を受けて正規採用されている率は、全国平均より少し低い程度です。横浜あたりだと民間の就職口がある。それよりも、教員採用試験を受ける者が5割ぐらいしかいない。合格率はすごく高く、県内出身者は8割ぐらい受かる。受けてさえくれば受かるが、まず受けない。いろいろ調べてみると、センター入試が始まった頃から、うちは偏差値がちょっと高くなっている。高校を廻ってくるとわかるが、偏差値が高いということは自分の得意な教科を教えたい。本学は、入学生の半分が中高の教員志望で

ある。中高は採用が少なく、専門の学部出身者と競わなければならないことを学生は知らないの、小学校の免許も取れるから、本学に来て中高の免許も取って教員に成りたいと思う。追跡調査をしているが、1年生から3年生になるまで、ずっと中高の教員に成りたいといっている学生が、4年生になると、そのほとんどが採用試験を受けない。ほとんど採用がないわけだから、こんな倍率のところに自分で行けるかとか、年齢制限もなく社会人枠もあるので、民間に出てから免許さえ持っていればいつだって受けられるというのが、本学の学生の理解なので、優秀な学生が最初から教員採用試験を受けずに一回外へ出てしまう。実際は5割しか受けてなくて8割ぐらい合格率が上がっているの、どうにか4割超ぐらい教員を出している。でも全国平均は6割だから、4割ぐらいは今の財務省的考え方からいくと有り得ないので、教員養成をやめるのかと言われかねない。ただ、今は6割を目指して取り組んでいる。そのために、今年度は、友松会にご協力いただいて、横浜市立の管理職の居られる学校に体験学習の紹介をしていただき、秋学期から1年生がお世話になっている。他の授業の時に、出席扱い願いを出して、回数は限っているが、できるだけ行きやすい形にしたので、結構学生が行っているようだ。今の教育は大変だよ、挨拶はこうしなきゃいけないとか、こんなことやっちゃいけないとか、厳しいことばかり言っていたので、そうではなくて教員の楽しさのようなことを感じさ

せる方がいい、早いうちに体験学習に行かせるのがいいのではとのご意見があったので、1年生から活動できるようにした。今の1年生が4年生になるまでにはしばらくかかるが、いろんな試みを今年度はしていて、現場で活躍している卒業生を呼んで、その人たちと交流するとか、横浜市立小学校の元校長に昼間に入ってもらい、学生の相談窓口を開設し、今、教員採用試験に落ちた学生の面倒を見てもらっている。臨時的採用にするのか、どうするかを、私たちがでなく、現場を知っている人に対応していただいている。

就職支援は、友松会に協力いただいて、夏休みに講座を開催していて、あの講座を受けた学生の合格率は非常に高い。ありがたいかぎりだが、まずは受けるかどうかかむずかしいところです。入学時において教員になりたいと思っている率は8割です。それ以上は増えない。今年の入試から一般入試でも面接をすることにしたので、もう少し増えるかもしれないが、学年を経るごとに教員志望率は必ず下がる。他大学も同じ状況のようだ。減るのをどこまでで止めるかが今の課題。教育実習でいろんな体験をして下がるのをどうケアできるのか、事前にどんな準備ができるのか、少しでも率を下げないことを考えているところである。それには、友松会にも相談してご意見を聞かせていただきたい。

司会 学生の様子をうかがえてよかった。福田先生も学生の就職率をアップさせようと努力されたと思いますが。

福田 杉山先生が一生懸命やってくださっているが、例えば入試改革をしても、その成果が出るのはその4年後です。時間がかかることを繰り返しやっていかなければいけない。その間に任期が切れたりするわけですね。先生方全員がしっかりと取り組む必要があると改めて感じます。

杉山 多分、教員就職率8割となると、教員を強く希望する生徒達が来るようになりますよ。今、うちは5割を切っていますから。だから、「ここだったら半分以上は教員じゃないよね」と言う生徒も来てしまう。

福田 どこかで改善して、7割、8割になってしまえば、それは勝ちなんですよ。(杉山「そう」) 弾み車のようですが、ほんとに始めるかどうか、そこですよ。

金子 平成17、8年頃ですか、文科省が、教員養成の学部の資格を6割ぐらい教員にならないと認めないというような時期があったことを覚えています。

杉山 今ちょうど文科省の資料を作っていて平成15年以降のデータを見ると、うちは6割を超えたことはない。5割を超えたのが数回あるのみ。今、国立大学の教員養成学部の平均が6割です。ただ、国は6割でも低すぎると言っている。片方で小学校の教員養成を私学にもどんどん認めているので、全体で見ると小学校は私学の方が教員を出しているのは多いでしょう。教育委員会に聞き取りをしていて、例えば管理職、指導主事に卒業生の割合が高いので、人数は少ないけれど優秀な学生達が教員になっていると言っています。

福田 今のお話のように、量と質の問題があって、常に求められているのは量なのでですね。どんな先生を輩出したかは問われていない。数値目標という形で数値が明示されて、それをクリアできるかどうかの評価の対象になってくる。ほんとうにそれでいいのかとみんな思っているのですが、学部長は当然そこに縛られてくるという、ジレンマですよ。

芦川 需要と供給の関係で言うと、神奈川県は教員の採用がとても多い。例えば、横浜市は小・中・高で数百人の新規採用をする。県下のそれぞれの地域も教員が欲しいと言って採っている。だから、横国大の学生は、教員になって市町村へ行った時に、それを育てる環境がある。私は45支部を廻りながら現場の声を聞くと、どうして横国大卒の新採用が来ないのか、我々は期待しているのだ、心待ちにしているのに今年は1人だったとか、ここ2、3年来てないとか。

杉山 私は、教育界がたいへんだということは、よくわかる。特に優秀な学生が、あの学生は絶対に教員になって欲しいと思っても、民間に就職し、数年後に民間から戻ってくるケースがあるのですが、そのデータを大学側が持っていないのです。さっき福田先生がおっしゃった「卒業生とのつながりを持つ」、そこが多分国立大学の弱いところだと思う。

国立大学はさらっとしているから卒業して出て行ったらほとんど音信不通とか、そういうことはざらなんですね。つながって

いなくてはいけないと思っていないのです。そういう状況だから同窓会にも入らないし、実際に卒業後のデータもほとんど取れない。でも今はそんなことは言っていないし、なんらかの形で卒業生に連絡を取り、卒業後、非常勤をやっていると民間を辞めて教員になっているという人が実際に居るので、その辺のデータを私たちは持っていなければいけない状況です。

相吉 素朴な質問ですが、小学校などは特にそうだが、地元の子も達を地元の学生が教えるという意味では、神奈川県出身者がなるべく大学で教員の資格を取って地元に戻って欲しいと思っている。ところが、国立大学だから神奈川県だけを優遇するわけにはいかないよという縛りがあるのではと思いますが、実際に神奈川県出身は何割ぐらいですか。

杉山 今、半分ぐらいです。増えました。平成14年に私が大学に来た頃は、県外の方が多かった。今は入試に地域枠といって、神奈川県を優先する形を作っている。ただし、国立大学だから地域枠をあまり大きくできないのです。県内が少なかったから地域枠を導入したが、半分までいったのなら止めてもよいのではというのが文科省の考え方です。

金子 友松会の中に高校の管理職の会で七夕会というのがある。そこへ会長は出席していろいろ話を聞くのですが、なかなか横国大に入れないと。高校を卒業して教員になりたいけれども横国大に入れないと子が結構多いという話を聞く。

杉山 地域枠は増やせないの、とにかく学力を上げていただくしかない。

福田 一番大きなターニングポイントは、共通一次なんですよ。そこまで一期校、二期校で皆さん育ったと思うのですが、そこまでは神奈川県出身者が多かった。多分、六割か七割居た。共通一次を境目にして、全国区に変わった。同時にハードルも高くなった。今までは地産地消モデルだった。



福田元学部長

友松会モデルって、多分そうでしょう。地元の人が大学に入ってきて、地元に戻ってみんなまで育っていくという。それが全国から集まって来て、また散っ

ていくわけです。そうすると友松会のモデルが成り立たなくなっている。それで、友松会から、いろいろ話があって、結局地元枠というのを作ったのです。

過去に学ぶ

司会 過去に学んでこれからにつなげるという意味で、相吉先生いかがですか。

相吉 大学の教員養成学部というのですか、平成12年頃、今話題になっていることに関連するのだが、横国大の志望率も合格率も低迷していた時代に遭遇し、国から近隣の大学に統合するぞという厳しい状況の中で、大学も大変頑張って大学内部からも学長にぜひ教員養成学部を存続して欲しいと請願書を出されたということも「友松98号」の中に書いてありました。同時に友松会も当時の伊従会長を中心にして横国大の

教員養成学部を残す会というのを立ち上げて、署名活動を始めた。たしか8万8千人の方が署名をした。それを持って意見書という形で国へ要望したと聞いて



相吉元副会長

ており、そのことも書かれている。その時に、本学卒の大石尚子衆議院議員が文部科学委員会で文部科学大臣に質疑し、ぜひ横国大に残してほしいと要望している。大学も頑張ったし、友松会も県民に広く理解してもらった。そういう上で、存続されることになった。過去に、友松会も大学と連携しながら尽力したことは、忘れてはならない過去の教訓の一つではないかと、私は思っています。

福田 友松会と大学との関係で言うと、その再編統合問題が一つのきっかけになった。それまでは、はっきり言うと友松会と大学の関係はそんなに密ではなかった。学部の側にも問題があったかも知れない。友松会は独自に活動をされていた。もうタグを組まないと危ういということになって伊従先生をはじめとして様々な支援をしていただくような形になった。その後、就職活動でサポートいただくというような形で、平成15、16年頃から少なくとも違った形にはなってきました。

友松会の大学支援

司会 平成16年がいろいろな分岐点になっているのですね。就職支援の面接とか論文指導とか友松会で力を入れるようになった

のもそうですし、今それを引継いでいる状況を高橋先生に、大学院と現場の先生をつなぐということで塚田先生にお話しただいてと思いますのでよろしく願います。

高橋 我々卒業生としては、一人でも多くの横国大生が教員になって欲しいという願いで事前指導に関われることに喜びを感じています。実際に当日アンケートを貰うと普段も練習しているのだが本番さながらの緊張感の中で面接ができて、それが本番にすごく生きたというような意見を私も直接聞かせていただいた。これはこれからも大事にしていきたいと思う。先程、教員が大変だという話が出ていたが、実際はニュースで取り上げられるのは悪いできごとであって、本当はすばらしい実践だとか教師として涙が出るほどうれしいできごとだとかは、ほんの一握りしか新聞で取り上げてくれない。ですから、教員は大変だとか、



高橋副会長

自分ではとてもとか、そういう形で早く結論づけてしまう学生が多いのではないか。もし可能なら、もっと私達が感激したとか苦しいこともあるが乗り越え

たとか、こんなすばらしかったと語れる場所があるといい。面接指導は本当に重要だし今後も続けるべきです。本年度は、今までのメンバーではなく、面接官を県下のブロックから経験のある方を選んで、年齢もそんなに高くない方々が対応して、学生達が自信を持てるような事前指導を一生懸命

やろうとしています。また、小学校は全教科だからいいけれど中学校は各教科揃わないと駄目で、人材的に難しいが、友松会の中には中学校の体験者がいっぱいいます。上手に使っていただいて、いい体験、学生達がぜひ教員になりたいと思えるような、そういう語る場を協力してくれということでしたら喜んで行きたい。声を掛けていただければと思っています。

塚田 私は、大学で現職の先生と大学院の副専攻の院生を対象に、理科指導における中核的教員(コアサイエンス・ティーチャーCST)を養成する事業に関わっています。



塚田常任理事

この事業は「理科好きの子どもを育てるためには、まず理科好きの教員を増やすことが必要」という目的で横浜国大と神奈川県教委、横浜市教委、川崎市教

委、相模原市教委、県青少年センターが連携して国の委託を受けて始めた事業です。現在8年目を迎えます。現場の先生方は1年間～2年間、大学院生は2年間、夏休みを中心とした日程で様々な理科分野の勉強を深くやり直し、審査を受けてCSTの認定を受けます。その後CSTとして現場で理科の苦手な先生方やその他さまざまな子ども達や先生方に、教育委員会と協力して理科指導のおもしろさや重要さを伝えていきます。現在200名のCSTの先生方が県下で活躍しています。このようなCSTの事業の中で、さらにすばらしいことは、大学院生と

現場の先生方の交流ができていることです。授業を受ける合間や昼食時に現場の先生方は大学院生の持っている知識や実験方法を学び、大学院生は学校の様子や子ども達のすばらしさを知る機会が多くあるようです。今年は、副専攻生全員が教員採用試験に合格しました、そこで、大学院の院生の方へも友松会勧誘の手立てをお願いします。院生のほとんどが教員志望です。

司会 杉山先生はここまでですが、一言なにかございませんか。

杉山 さっきの何年か前に大変だったという、それと同じことが、今起きています。もう中小すべての教科の免許を出す必要はないだろう、他大学と連携をと言われていきます。運営交付金が減らされていく中で、教育学部を持っている大学には教育は大事だから手厚くとは国としては言えないのです。財務省に説明するために文科省は、数字が大事、なんらかの成果を示すことのできる数字が必要と。でも、本当の意味での教育というのは、そんなに成果を簡単に数字で表すことはできないとも思う。ただ私達も、現場の先生方へヒヤリングをしたり、どういうニーズがあるのか調査をしたりして、私達はきちんとニーズに応じて取り組んでいるという形は出していないと学部は縮小していくしかない。もう早いところは、大学間で連携するという話が始まっているのです。

福田 そういう意味で友松会の連携とか皆さんのバックアップがないと難局を乗り越えられない、厳しい状況にあることは確か

ですね。

友松会の基盤づくり

司会 友松会の基盤づくりということで、高橋先生、120周年の座談会でいろいろ提言されていましたが、いかがでしょうか。

高橋 120周年の座談会に出席させていただいたのが、ついこの間のような気がして、10年の速さに驚かされています。しかもこの10年間に、様々な変革や課題があり、特に大学の学部の再編とか学生会員ができたこととか、校友会の発足、それに伴う同窓会連合の発展的解消と、これは友松会の歴史の中でも大きな部分だと思います。特に学生会員を含む若い友松会員の参加率とか意識の改革とかがこれから非常に大きな喫緊の課題となってきているのではないかと。ですから130周年を機会に若い世代の関心と意識を高めて、友松会活性化の契機にしていければと思っています。

司会 芦川会長は全支部の総会にも出ておられるということで、いろいろな県内事情とかをご存じだと思います。いかがでしょうか。

芦川 45支部ありますが、残念ながら全部の支部では支部総会ができていません。全体的には3分の2ぐらいで、和気あいあいと楽しくやっています。基本的なところは同窓会ですから、やはり卒業生、それから今学生会員が一体化すること、ひいては神奈川県あるいは全国的に教育界を充実、発展させる役割を私たちが持つのだと意識するような形になっていけば構えも違ってくるのではなかろうかと思っています。今、大学

の方でもオリエンテーションを新入生の入学式の直前にやっていますが、同窓会から話をする機会をいただいています。また、入学式後、学部の保護者説明会では、一昨年から2時間のうちの1時間をいただいて友松会が話をしています。

今の卒業生は入学時点から会員ですから、「卒業を祝う会」を去年初めて実現しました。また、校友会ができて、スケールの大きい企画をしており、新入生の横浜港クルーズには、300人くらいの学生が学部を越えて参加しています。学生全体に向けて就職支援の模擬面接もやっており、教育学部でも教員にならず企業に就職したい学生が、昨年は20人くらい参加しています。

塚田 支部活動の活性化ですが、幸支部は比較的若い先生方がよく出てくれました。支部長の研修で、支部活動活性化のためのアイデアのような感じで、こんなことやっているよとか、こんなふうに支部長は努力しているよと、お互いに勉強する機会があると、それぞれの支部活動が活性化するのではと思います。

高橋 10年前の座談会には、支部長代表として出ています。横浜中支部の支部長だったのですが、なんとか支部総会をもう1回復活できないかという話があって、当時の管理職の2、3名と相談して、とにかく人数はいいからまず開こうよということで復活させて、今年まで続いています。会長が参加してくださるのですけれど、うちの良さは若い会員がたくさん来ることです。会員同士が学校を越えて自分たちの悩みとか

が話し合える。だから、それを楽しみに毎年来ます。支部長としては、まず場を作らない限りは駄目なので、場を作るという意味では、一人でも二人でもいいから、総会をまず開こうと、そして声掛けをして、ああやっぱりあるといいねという実感を持たせないと、ただ開け開けでは、きっとやっていけないと思う。その辺のところを支部長の方々、もし総会が開けなくて困っている方は、まず開くことからやってみてはどうですか。その時に頼りになるOBの方に声を掛けてアイデアをもらったりすると、さらにいい。

金子 今、幸区の話が出たけれど、なんで集まりがいいかと言うと、一つは研修がある。しかも友松会出身の校長が、これには是非ということで、若い先生をみんな連れて来るんですよ。だから幸区が一番集まりがいい。それは研修があるとか、声を先輩が掛けるとかです。やっぱり同窓会というのは言葉掛けがないとね、一人で行く気にはなかなかならない人が多いので、誘い合うということが大事ではないか。昔は、師範時代の人はみんな顔見知りで出て来たが、今は科や専攻が違うとなかなか友達同士呼び合うことができないと言う。どういうふうに活性化していくか。

福田 とにかく同期という、卒業年度、入学年度が同じ人たちが仲間意識をみんな持ってきたのが、今は大体2年次から分かれていて、各専攻単位ではぼ動いているんですよ。そうすると、同学年だけどよく分からないというような形で推移してく

る。だからもう1回取りまとめていかなければいけないというところがありますよね。
芦川 ですから「卒業を祝う会」の時に、それをゼミの方をお願いして、ゼミの方の代表を一人決めてもらって、自分のゼミの参加者を取りまとめ、ゆくゆくは同期会の時には、その人が幹事になってもらえないかという形をとっています。

福田 要はキーパーソンが育っていかなければいけない。中心になって運営していき人たちを作らないとなかなか継続しないですよ。

高橋 友松会の場合は、OBという年取った方は、あるから行くのです。ところが若手は、行った甲斐がある、だから行くのです。行った甲斐がある会にするというのは、今言った研修だとか、若手が生き生きとできる場作りだとかを工夫すると、ずいぶん変わってくるのではないかと。

金子 それから、松沢賞ももっと活性化していく必要があるのではないかと。

相吉 さっきいい言葉で、年寄りはあるから行く、若手は行った甲斐があるから行く。行った甲斐があるような会ってというのは、どういう持ち方がいいのか、そこには先程から出ている研修的な内容も少しきちっと入れて、それから娯楽的なコンサートを入れるとかという形で工夫してみると、支部にもいい刺激になるような気がするのですが。

福田 支部の作りも少し考えていかないと。近くのところは一緒にできるという形にしていくのも、一つ、「再編」の声)そ

う、再編。みんな歴史があるからむずかしいと思うが、頑張っているだけではなかなか進まないから。

高橋 松沢賞の話が出たので。松沢賞はもともと表彰だけだったのです。それがもたないからというので、賞をもらった研究をもとに、発表と研究協議をしよう。そういう形になったのはすごくよかった。現役にとっても情報交換の場にもなっているし、すばらしい。ただ、学生会員が新しくできて、そういう発表の場、総会でもいいから、学生会員が参加できるような条件設定ができないものか。それが今後の課題かと思っています。語る会から、今は「豊かな教育を考える会」と名前も変わって前向きになってきました。

福田 授業の一環として入っていたケースがありました。仕掛けが必要ですよ。

司会 来れば刺激を受けるし、今年もすばらしい発表でした。ぜひ若い人に聞いてもらいたいという感想がたくさん聞かれたところです。

福田 モデルなんですよ、将来に向けて。何年ぐらいやるとこんな先生になれるんだというものを見せてあげて、励みにしてほしい。

友松会の発展に向けて

司会 学生の中に繋がって、それが同窓会にも繋がっていくことが大切だと思います。最後に、これからの友松会の発展に向けての提言を一言ずつお願いいたします。

金子 これからの友松会と言うと、私は今お話のように学生が、友松会の正会員とい

う形が入ってきているので、学生の頃から友松会の活動に参加するような体制をとっていかないと、卒業してからという感じになるとなかなか集まってこれないと思うんですね。ですから、学生会員であっても、例えば総会であるとか、新春のつどいであるとか、そういう会に呼び掛けをしていくというようなことをしていかないと、今まで通りであったら尻すぼみになってしまうんじゃないか。そういう点で学生の存在というのを先ず大きく取り上げていくのが、第一。それから、今までの会員はそういう形をとることはむずかしいので、福田先生のお話のように専攻と言うんでしょうか、そういう方達の集まりができて、



野村副会長

そこへやっぱり声掛けをして盛り上げていくことが必要なんじゃないか。組織としては出来ているんですね、その組織を同窓会組織にどう繋げていくか、

というあたりをこれから配慮していかねければいけない。もう一つは、合併するような所があってもいい。

塚田 私も同じようなことを考えたのですが、これからは支部活動の活性化をやることに、学生会員は地域の人が多いと思うので、そういうところに呼んではどうでしょう。学生としての悩みとかもあるだろうし、教員になった時のすばらしさ、子供のかわいさ、良さ、子供は大変じゃなくて、子供って本当はいたずら坊主でもかわいいん

だよということ、支部で話してもらい、それで学生のうちに同窓会との繋がりができたらいいと思います。

相吉 国立大学法人になった年に始めた就職支援講座、あの時には、3年生と4年生を対象にしていた。4年生が勿論重点的です。7月に大体採用試験があるから、4月から7月にかけて、10回くらい講座をやって、いろいろ演習をやりました。こういうことで学生会員が友松会との結びつきを実感できるのではないか。3年生辺りからその意識を持たせようという学生会員への具体的な働きかけの一つとして大事だと思いました。

情報化社会で、子ども達までスマホ等の情報機器に夢中になっているようですが、学校は面と向かった人間関係を育てる場ではなければなりません。面と向かってお互いの悩みなど、いろいろなぶつかり合いの中で話し合いをしていくのが教育の仕事です。情報も大いに利用するが、また、こうやって話し合っているとこういう勉強になるぞというような機会を工夫していくことも大事です。何か教育に対して、もう少し直接会っていろいろ話をしていくことが大事なんだという意識を学生会員にも持ってもらい、そんなことで配慮しているんだということを、まあ、私達の姿勢で示せばいいと思います。

司会 福田先生いかがでしょうか。

福田 今度教育学部になって学校教育課程の卒業生が出るわけです。先生にならなくても、彼等はメンバーなのです。そういう

人達への対応も同窓会としては大事なことで、そこら辺をどうするのかという事を考えていかなければいけない。それから先生になった場合も神奈川だけじゃないですよ、各地に散らばって行って頑張っている卒業生が居るわけですよ。そこに目を配るようなことも必要になってくる。

芦川 新しい動きとして、校友会の組織をそう変えようとしています。

福田 アドバイザリースタッフの部屋があって、相談に行ったらいろいろ話が聞けるとか、友松会で派遣できるので、大学の学びの中でいろいろフォローしてあげるような仕組みがあるといいですね。

塚田 そうですね。

福田 ネットワークなんですよ、若者たちというのは。逆に言うとそこが組織の活性化の原点になるのではないか。(塚田 繋がってる) そうそう、繋がっているんです

よ。だから、そこをつかまえてというところが大事です。

金子 繋がりと言うと、どういう繋がり方をしているか、それを考えてやっていくといい。

芦川 改革をして、新入生の会費納入会員が80%にもなったら、相当な力になり、同窓会の活性化に非常に貢献します。

福田 お金を貰うということは責任も発生するんですよ。それに見合うような友松会としての活動が、当然求められてくるわけで、頑張らなきゃいけない。

芦川 皆様からのご提言を将来的に考えて、友松会のさらなる発展に努めてまいりますので、ご支援ご協力をお願いいたします。

司会 いろいろと心の籠ったお話をうかがい、会って話すことの大切さを感じた2時間でした。ありがとうございました。

